

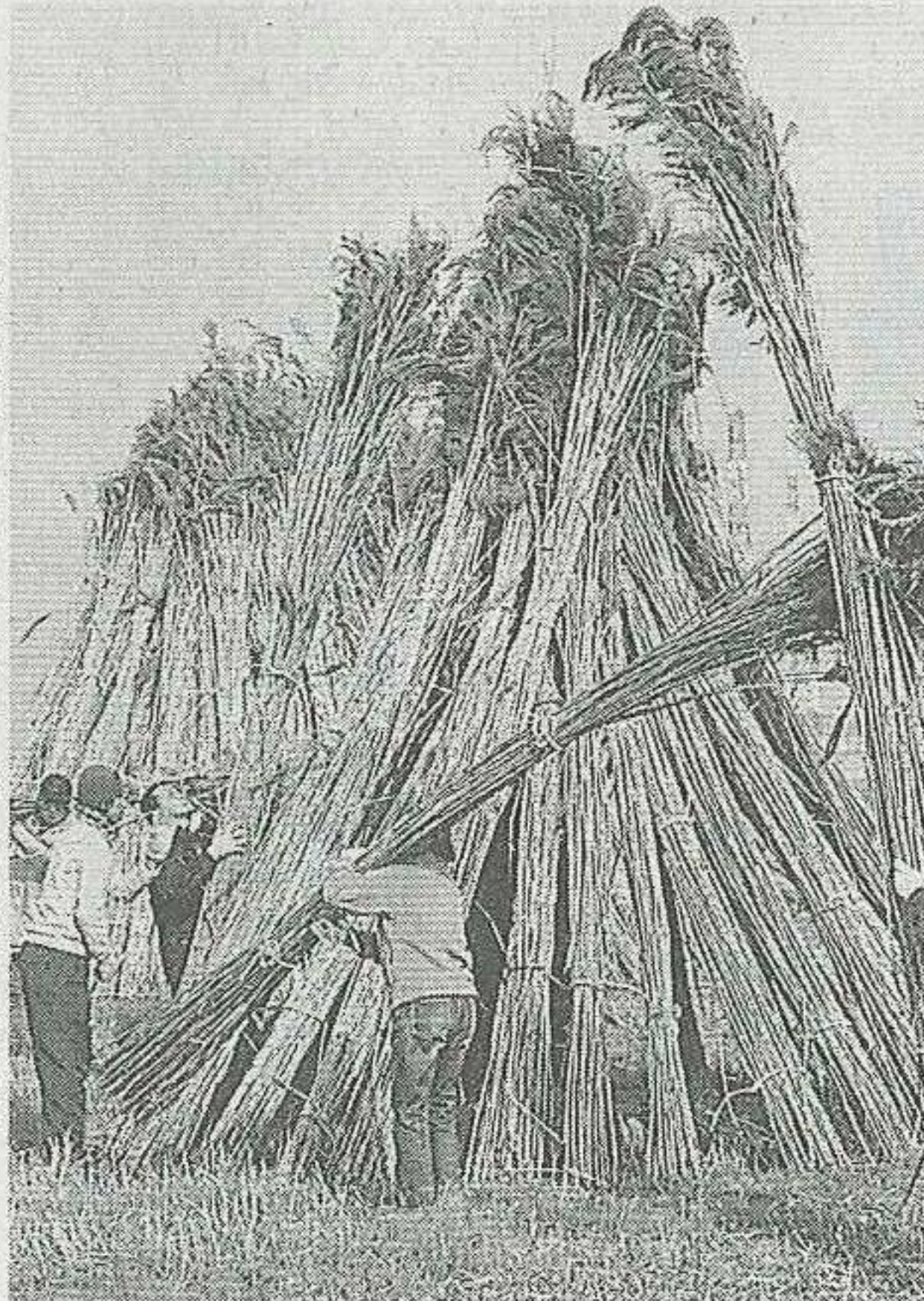
ヨシ紙 淀川 の原守る

越前和紙製造会社「山田兄弟製紙」(越前市不老町)と、ヨシ原の保全活動に取り組む市民団体「鵜殿ヨシ原研究所」(大阪府高槻市)が共同で開発した「ヨシ紙」が、エコブームに乗って注目を集めている。紙の原料にヨシを使っていることから、森林伐採の防止にもつながるとして、「環境に優しい」と人気だ。(青木さやか)

槻市の淀川河川敷に広がる鵜殿ヨシ原で刈り取りを開始。刈り取った後は焼却していたが、活用法を探っていた同研究所の小山弘道所長が山田兄弟製紙に鵜殿ヨシ原のヨシを使った紙の製作を提案した。

ヨシはイネ科の多年草で、川や池、沼で約30センチの地下茎を張り巡らせて群生、秋にはスキのよな穂をつける。水や土から水質汚染の原因となる窒素やリンを取り込むほか、二酸化炭素も多く吸収する

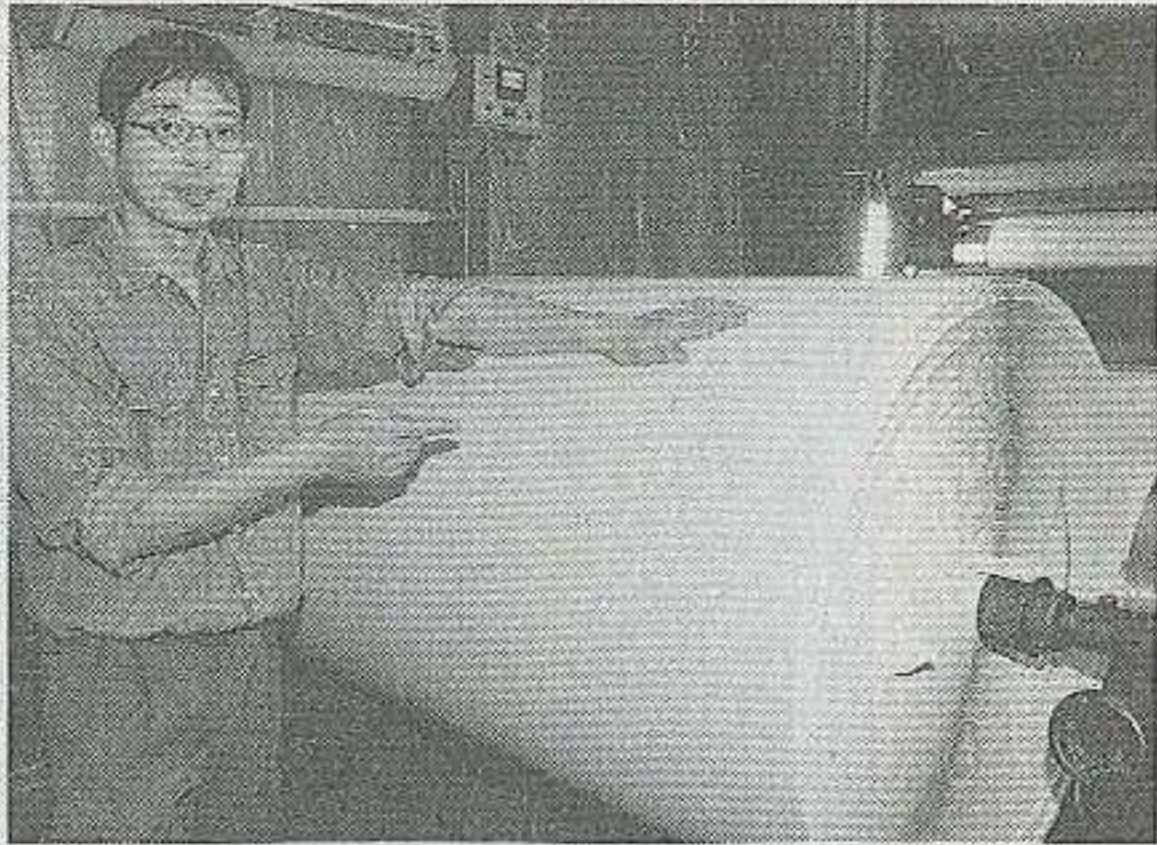
ヨシ紙は、薄茶色の素朴な色合いや、柔らかい手触りが特徴。越前和紙の技術を生かした「すかし」を入れることも可能で、桜や紅葉の柄のすかしが入った便せんや封筒などもある。



ヨシ紙の原料となるヨシを刈り取り、乾燥させる作業を行うボランティアら(鵜殿ヨシ原研究所提供)

同社は2年前から本格的に作り始め、現在は年間約10トのヨシ紙を生産。大手文具メーカーにも卸しており、売り上げは全体の約4分の1を占めるという。山田晃裕社長は「ヨシは雅楽の楽器『箏(ひちりき)』の一部にも使われており、ヨシ原を守ることが、日本の伝統文化を守ることににつながる。ヨシ紙の良さをもっとPRしていきたい」と話している。

「ヨシ紙を利用した製品を多く考え出し、さらに利用を広めたい」と話す山田社長



越前和紙の技術で開発

市民団体から依頼 刈り取り後活用

「環境に優しい」と人気